

パンチの人工哺育とこれまでの経緯について

パンチは1月19日からサル山にて過ごし始めたこと、当園の公式Xにて発信させていただきました。現在までに心温まる数多くの応援をいただき感謝申し上げます。また国内外から、人工哺育や群れ入れに関する様々なメッセージやご意見が寄せられています。これらに可能な限りお答えできますよう、これまでの経緯を整理してご説明します。

- ・園としては、動物福祉の観点からパンチを群れに戻すことを最大の目標としています。
- ・群れに無事加わるにはパンチ自身の意識が最も大切ですが、群れの全個体がパンチを群れの一員であると認識できるよう、哺育はサル達が自由に入出できるサル山の舎内で行いました。
- ・ぬいぐるみやタオルに抱かせることは、母親にしがみつく行動を補助するだけでなく、人への過剰な依存を抱かせないためでもあり、ニホンザルに限らず当園のサル類の人工哺育では同様の手法を採用しております。
- ・さらにパンチの場合、成長に必要な身体的接触と安心感は、2名の担当者が哺育のタイミングでしっかりと与えることとしました。
- ・パンチがある程度成長してきた段階で群れになじませるため、生後3か月頃から他のサル達と柵越しに直接自由に触れ合える環境で過ごさせたり、生後4か月を過ぎたころからは担当者と一緒にサル山に入りその中で過ごしたりと、群れに戻すための準備を慎重に進めてきました。
- ・1月19日の群れ入れ前には、以前よりパンチに優しくしてくれる若いメスと一定期間一緒に過ごさせました。その様子から、人を介さずパンチ自身の力で群れの他個体と一緒に生活できると判断したため群れ入れを決定しました。
- ・パンチは今現在もぬいぐるみを抱えての生活を送らせています。ニホンザルの子供は生後半年くらいになると母親から離れて自由に遊ぶ時間が増えていきます。安心して時や母乳を飲みたい時に母親のもとへと戻るとするのが生後半年頃の子ザルの生活です。パンチの場合、安心して時や危険から身を守るときはぬいぐるみに身を寄せますが、ミルクや食事の補助は担当者が行っています。
- ・当園では過去に複数の人工哺育個体を群れ入れさせています。一例として2009年に行った「オトメ」という個体の群れ入れ事例について、園のホームページでレポートを公開していますのでご参照いただければ幸いです。オトメは成長の過程で、自然とぬいぐるみから離れていきました。また、その後4度出産し、全て自ら育児を行っています。オトメの子も同様に出産し自ら育児を行っています。
- ・以上の経緯と経験を踏まえ、スタッフ一同パンチが群れの一員として健康で健全なニホンザルとしての生活を送れるよう全力を尽くしてまいります。

#がんばれパンチ

2026年2月27日
市川市動植物園